



**<講演抄録>8. 咬合改善により著明な不定愁訴の消退  
と姿勢の回復を得た1例(第29回東北大学歯学会講演  
抄録)(一般演題) : 特に4分割体重計の歯科的応用**

著者	室野井 基夫, 浅井 澄人, 斎藤 浩二, 清水 良央, 大家 清
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	15
号	2
ページ	192-193
発行年	1996-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/31575">http://hdl.handle.net/10097/31575</a>

## 6. リンパ球表面マーカーによる重度歯周炎患者スクリーニングの試み

庄司 茂, 根本英二, 石幡浩志, 遠藤英昭, 堀内 博 (第一保存)

歯周疾患は骨粗鬆症とともに, 平成7年度より市町村で行う成人検診で40歳および50歳の検診項目に取り上げられている。これまでの歯周疾患の集団検診には歯周治療必要度指数 (CPITN) を用いる方法が行われている。しかし, CPITN 法では全身状態を把握した歯周治療必要度を提示することは出来ない。そこで, 重度歯周炎患者の末梢血中の T および B リンパ球表面マーカーを分析し, 歯周疾患の臨床症状と全身状態との関わりについて考察し, スクリーニング法としての意義について検討を加えた。

被検者は東北大学歯学部附属病院保存科外来患者で全身疾患を発病していない重度歯周炎患者20名 (JP: 8, RPP: 5, AP: 7) と歯周疾患を持たない健常者5名である。モノクローナル抗体 (SmIgG, A, M, D; CD3, 4, 8, 11b, 45RA; HLA-DR) を用い, フローサイトメトリーでリンパ球を分析した。分析結果より JP と RPP では, SmIgD 陽性の B リンパ球の比率が高く, HLA-DR (-) でしかも CD8 (+) の休止期サプレッサーまたは細胞障害性 T リンパ球の比率が AP で有意に低かった。

40歳以上の患者では病歴を正確にたどることのできない場合が多く, しかも, 健常人であっても測定値に大きな幅も見られる。しかし今回の結果より, 末梢血中のリンパ球を主体とした免疫系の異常と重度歯周疾患との関わりが推察され, 歯周病検診項目としての可能性が見いだされた。

## 7. 耳下腺に生じた筋上皮腫の組織化学・免疫組織化学的検索—多形性腺腫との比較

石川高行, 熊本裕行, 大家 清 (口腔病理)

筋上皮腫は, 腫瘍実質が唾液腺由来の筋上皮様細胞からなる, 稀な良性腫瘍で, 組織像や由来より多形性腺腫の亜型とされていたが, 1991年 WHO 分類では独立した病変として取り扱われた。今回, 耳下腺に生じた筋上皮腫の1例と同部位の多形性腺腫5例とを組織化学・免疫組織化学的に検索し, 比較した。

【症例】 30歳, 男性。5歳時, 鼠径ヘルニアの手術, 11歳時に扁桃摘出の既往がある。現在, 鼻アレルギーに罹患している。28歳時に, 右耳介部後方の腫脹を自覚し, 耳下腺腫瘍の臨床診断で摘出したが, 約2年後

に同部位に再発した。摘出物は, 肉眼的に薄い線維性被膜を有し, 断面は白色調で充実性だった。組織学的には, 腫瘍実質は, 紡錘形の細胞と, 核が偏在し硝子様の細胞質を有する形質細胞様の細胞からなり, 密な増殖がみられた。電顕的には, 腫瘍細胞は, 発達した細胞小器官と少数の分泌顆粒を有し, 一部では腫瘍細胞境界に接着装置の発達が認められた。

【材料および方法】 筋上皮腫1例および多形性腺腫5例について, 組織特異性マーカー, 細胞増殖動態, 癌遺伝子および癌抑制遺伝子の発現を組織化学・免疫組織化学的に検索した。

【結果】 1) 組織マーカーの検索: アルシアン青, PAS, サイトケラチン, ビメンチン, S100, アクチン, ラクトフェリン, SC は, 筋上皮腫・多形性腺腫とも陽性だった。EMA は筋上皮腫が陰性で, 多形性腺腫が陽性だった。2) 細胞増殖動態の検索: 平均 AgNORs 数と PCNA 陽性率は筋上皮腫が, Le<sup>y</sup> 陽性率は多形性腺腫が, 有意に高い値を示した。3) 癌遺伝子および癌抑制遺伝子の検索: p 21<sup>ras</sup>, bc1-2, p 53 の発現に著しい差はなかった。

【考察】 筋上皮腫は, 臨床所見・病理組織学的所見ともに多形性腺腫と多くの類似性を示したが, 多形性腺腫に比べて増殖活性が高く, 生物学的特性に差異があることが示唆された。

## 8. 咬合改善により著明な不定愁訴の消退と姿勢の回復を得た1例—特に4分割体重計の歯科的応用—

室野井基夫, 浅井澄人, 斉藤浩二, 清水良央, 大家 清 (口腔病理)

4分割体重計は, 体重計4個を前後左右に, 同一水平面上に配し, 体重を4カ所の分散の仕方で評価できる。今回, 咬合の改善により特に不定愁訴の著明な消退がみられた症例の治療前後での4分割体重計による変化を観察した。症例: 23歳, 男性。身長173cm。主訴; 顎関節痛, よく噛めない, 頭痛, 左肩のこりと痛み等の不定愁訴であった。既往歴; 1歳時に左先天性筋性斜頸の治療で胸鎖乳突筋の切離手術を行った。現病歴; 1989年頃から眼瞼部の痛みや頭痛が出現した。1991年, 近医にて咬合の異常を指摘され咬合調整を受けたが改善せず, 1995年11月, 来院した。現症: 口腔内; 下顎の右側偏位, 前歯部切端咬合, 右側小白歯部に開咬がみられた。下顎の側方, 前方運動でのガイダンスが不明瞭だった。全身; 頭部の左側傾斜と右肩に比べ

左肩が高かった。治療：オクルーザルスプリントを装着し正中の修正と咬頭嵌合位の安定が得られた。補助的にマイオモニター、鍼治療を4ヶ月間計10回行った。治療後約3ヶ月で顎関節痛、頭痛、頸・肩の痛みの著明な消退と姿勢の回復がみられた。4分割体重計で治療前（左前 15.5 kg, 右前 18.5 kg, 左後 31.5 kg, 右後 25.5 kg）は、測定値は左後方が最大だったが、治療後（左前 27.5 kg, 右前 23.5 kg, 左後 21.0 kg, 右後 17.5 kg）は、右前方が最大だった。左右（治療前-左 47.0 kg, 右 43.5 kg, 治療後-左 44.0 kg, 右 41.0 kg）は、治療前後ともに体重はやや左に偏り、治療後、差はわずかに減少した。前後（治療前-前方 34.0 kg・後方 56.5 kg, 治療後-前方 46.5 kg・後方 38.5 kg）は、治療後、体重が後方から前方への偏りに変化した。まとめ：咬合改善により不定愁訴や姿勢の異常の改善がみられた。咬合の変化は体重の分散に影響すると考えられた。

#### 9. 口腔扁平苔癬上皮における WGA 結合性の低下

菅原由美子, 丸茂町子, 三條大助(口腔診断・放射線), 秋田博敏, 加賀山学(口腔解剖2)

口腔扁平苔癬（OLP）は、難治性の慢性炎症性疾患であり、臨床的には網状白色病変を主体とするが、中には発赤、びらん、潰瘍、白斑などの種々の病態を示す。病理組織学的には、角化異常、基底細胞層の融解

変性、上皮直下の帯状リンパ球浸潤を示し、症例による組織変化の相違が顕著で、難治性の臨床病態を呈する組織変化の要因は解明されていない。また、その発症のメカニズムについても不明の点が多い。

そこで、今回我々は頬粘膜上皮細胞における糖鎖構造の変化を明らかにするために、OLP および正常粘膜の組織切片を WGA により染色して共焦点レーザー顕微鏡（CLSM）および透過型電子顕微鏡（TEM）を用いて観察した。

その結果、CLSM 像では、正常粘膜の細胞間橋およびゴルジ装置に強い WGA 陽性反応を認め、それらの陽性反応は基底細胞でやや弱く、有棘細胞で増大していたが、OLP では、WGA 陽性反応は細胞間橋およびゴルジ装置とも低下していた。TEM 像では、正常粘膜と OLP ともに WGA の結合はデスモソームに多く認められ、各層におけるデスモソームの WGA 結合数は、正常粘膜では有棘層深層で増加し、OLP では低下していた。ゴルジ装置の WGA 結合数は、TEM 像では明瞭には観察されなかった。

以上、OLP の頬粘膜では、有棘層深層のゴルジ装置で糖付加機能が低下し、デスモソームを構成する WGA 結合性糖鎖の減少が、上皮細胞の接着機能を低下させ、OLP の病態発現に重要な役割を果たしているものと考えられた。